統合実習前後で学生が捉えた看護課題の比較

三ツ井 圭子，中澤 明美，眞鍋 知子，村上 京子，羽毛田 博美，塩田 みどり，
松沼 瑠美子，金屋 佑子，根本 友見，本多 和子
了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

この研究の目的は，統合実習前後で学生が捉えた看護課題を明確にし，統合実習の指導に関する示唆を得ることである．対象は看護学科4年次73名で，統合実習前のレポートと最終カンファレンス資料から学生が看護課題と思われる内容を抽出し分析をおこなった．

統合実習前に学生が捉えた「看護課題」は，【看護管理について理解する】【看護・医療におけるチームワークの重要性】【複数患者を同時に受持つことへの課題】【看護観につながる目指す看護師像】【看護実習生としての自己課題】の5カテゴリーに分類された．

統合実習後の「看護課題」は，【病院内の看護管理の理解】【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】【看護展開のプロセスに基づく看護実践】【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】【状況変化に対応する実践】【時間を効率よく管理する能力】【専門職の役割と責務を認識した看護師像】の7カテゴリーに分類された．

統合実習前後の看護課題の内容を比較した結果実習後は実習前の約2倍のコード数があり，より具体的な看護課題が記載されていることが明らかになった．

キーワード：看護課題，統合実習，看護実践能力，看護管理，複数患者受け持ち

A Comparison of the Challenges of Nursing Practice that Students Perceived before and after Integrated Nursing Practice

Keiko Mitsui, Akemi Nakazawa, Tomoko Manabe, Kyoko Murakami,
Hiromi Haketa, Midori Shioda, Rumiko Matsunuma, Yuko Kanaya,
Tomomi Nemoto, Kazuko Honda
Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

The purpose of this study was to clarify the challenges to nursing practice that students perceived before and after integrated nursing practice, in order to obtain suggestions about the teaching of practice. The subjects were fourth-year 73 students of a nursing department. The content that appeared to be challenges were extracted from their pre-practice reports and their final conference documents, and were subjected to content analysis.

Five categories were induced from the pre-practice report: understanding of nursing management, the importance of team work in nursing and medical care, challenges to be in charge of more than one patient at the same time, an ideal image of a nurse, the self- improvement as a nursing student.

Seven categories were induced from the final conference documents: understanding of nursing management in a hospital, nursing practice to maintain and improve the care of a quality by teamwork, clinical practice based on the process of nursing deployment, nursing practice to respond to the trust and relationship centered on patients, nursing practice that corresponds to the situation change, the efficient time management skills, a nurse image by recognizing the professional roles and responsibilities.

The final conference documents contain twice as many codes as the pre-practice reports. The challenges of nursing practice were more specified through this study.

Keywords：a challenge to nursing practice, integrated nursing practice, clinical competence, nursing administration, charge of multiple assignment

はじめに

超高齢社会，疾病構造の変化，国民の意識の変化でより高い質を確保した療養生活のニーズ，医療の加速的な発達など高度化複雑化してきた医療現場に適応できないまま離職する新人看護師の問題は現在も続いている．これに対して看護基礎教育においても平成21年に保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部が改正され，より臨床実践に近い学習内容を強化するよう「看護の実践と統合実習（以下，統合実習）」が始まった[1)]．

統合実習の指導内容や方法は，学校の裁量に任せる部分が多く，各校が，複数患者の受け持ちをおこなう実習や夜間実習，看護管理の実習といった，領域別実習よりも臨床現場を体験できる工夫をしている．一方これまでに行われている研究では，実習方法や学習効果と課題に関連するもの[2－4)]，学生の学び[5, 6)]，達成度[7)] などの報告が多く，いまだ実習内容を模索している過程にあると捉える．

学生は看護学の臨床実習を体験することで，学内で捉えていた看護に対する意識が変化し，その学生の看護観へ影響することが大いにある[8, 9)]．臨床の看護実践を管理の視点で考え，複数患者の受け持ちをおこなう本校の統合実習においても，学生は新しい看護に関する課題（以下，看護課題とする）を見出すと考える．なお，学生の領域別実習終了までの看護基礎教育課程で得られた学生の看護課題と統合実習終了後を比較した先行研究は見当たらない．

目的

本研究では統合実習前後の事前課題レポートと最終カンファレンス資料から，学生の看護課題を明らかにし，統合実習の指導に関する示唆を得る．

研究方法

1. 対象

A大学看護学科の4年次に行われた統合実習に参加した学生97名中，研究協力を表明した73名を研究対象とした．

2. データ収集方法

統合実習開始前に書かれた課題学習レポートと最終カンファレンス資料から，学生の看護課題と捉えられる文章を文脈からの意味を推考して一義一文で抽出した．

3. 分析方法

内容分析の手法[10]により，文脈を読み取りながら「看護課題」と思われる記述を抽出した．抽出したテキストデータは，文脈の意味内容を変えずに単純化し，類似した意味内容の要素を探し，それらを適確に表す表現に置き換え，抽象度を上げていきカテゴリー化した．また，同様の意味内容であると研究者間で同意を得たデータの頻度も確認した．カテゴリーの内容と頻度を統合実習前後で比較し，統合実習の目標や実習指導と照らし合わせ検討した．

4. 用語の操作的定義

看護課題：学生が看護学実習を通して，看護専門職として成長する自分自身の現在の問題や看護実践上必要であると自覚した内容を看護課題とする．

倫理的配慮

学生の課題学習レポートと最終カンファレンス資料は，すべて学籍番号・氏名を削除し，データの匿名性を保持し分析した．また，成績への影響はないこと，参加は自由意志であることを書面にて説明した．研究協力は同意書の提出を以って同意を確認した．本研究は所属大学の生命倫理審査の承認（承認番号2728）を得ておこなった．

統合実習の概要

統合実習（以下，実習とする）を履修する学生は，領域別実習で学習の進め方，対象の理解，援助計画の立案・実施・評価，患者や指導者とのコミュニケーション，学生同士の連携などを体験している．学生は「既習の実習を振り返り，自己の看護課題を明らかにする」「この課題をもとに具体的な実習計画を立案する」「看護管理の概要」の3点を事前学習して実習に臨んだ．ただし，看護管理の講義は4年次の後期にあるため講義前の実習となる．実習90時間（2単位）は，臨床の看護部門の協力を得て，学生が複数患者の受け持ちや看護チームの一員としての参加をおこなった．詳細な内容は表１に示す．

表1. 実習目的・実習目標・実習の進め方

実習目的 既習実習のまとめとなる各自の看護課題を見出し，保健医療福祉チームの一員としての倫理観や看護観を深めるとともに，総合的な看護実践能力を培う．
実習目標 1. 既習実習を通して，興味関心のある看護実践や自己の成長につながる看護課題を見出すことができる． 2. 実習目的・目標を設定し，目標達成に向けた実習計画の立案と実習施設との調整ができる． 3. 看護管理の実際を知り，保健医療福祉チームにおける看護の役割と機能について理解を深める． 4. 看護チームのチームメンバー及びチームリーダーの役割を理解し，チームの協働に向けた行動がとれる． 5. 複数患者の看護を優先順位と時間管理を考慮して実践できる． 6. 看護実践を通して看護の専門性について考え，既習の理論や文献を活用して，「自らの看護とは（看護観）」について深めることができる．
実習の進め方 実習前半に実習施設の看護部長から病院内の看護管理についての講義を受ける．2日間，看護師（メンバーとチームリーダー）のシャドウィングをおこなう．病棟管理の見学をおこなう．実習後半に連続3日間複数（2名）受け持ち（チームに入って指導を受けながら複数患者のアセスメント･看護問題の援助計画の立案・実施・評価）をおこなう．

結果と考察

1. 統合実習前の学生の捉えた「看護課題」

実習前に学生が捉えた「看護課題」は，84コード，14のサブカテゴリーと【看護管理について理解する】，【看護・医療におけるチームワークの重要性】，【複数患者を同時に受持つことへの課題】，【看護観につながる目指す看護師像】，【看護実習生としての自己課題】の5つのカテゴリーに分類された．以下，分析結果はカテゴリーを【　　】，サブカテゴリーを[　　]，コードを〈　　〉で表す．詳細な内容は表2に示す．

表2. 統合実習前に学生が捉えた「看護課題」の内容　表中（　）内はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護管理について理解する(10)	看護管理の実際を学ぶ(5)	看護管理の実際を見て学ぶ(5)
	管理者の役割と実践を知る(5)	看護管理者のスタッフの教育方法
		看護管理者が全体掌握のためにやっていること(3)
		病棟管理者はスタッフにどう対応しているか
看護・医療におけるチームワークの重要性(13)	チームリーダーの役割と実践を知る(4)	チームリーダーのメンバー支援の実際
		チームリーダーの全体掌握の実際(3)
	チームナーシングを理解する(4)	チームナーシングの利点と欠点を理解する(3)
		一定水準の看護を提供するためのチームナーシングの役割
	医療チーム連携におけるコミュニケーション力(5)	医療チームにおける他職種を理解しコミュニケーションがとれる(3)
		一人の患者を看護するうえでの他職種との連携の取り方
		看護チーム内でのコミュニケーションの取り方
複数患者を同時に受持つことへの課題(11)	複数患者受持ち時の判断力と計画性(7)	複数患者受け持ち時の優先順位を判断する力
		複数受け持ち時の時間配分を判断する力
		優先順位を考えた看護計画の立案(3)
		状態の変化も予測した看護計画の立案
		所用時間も考えた行動計画の立案
	複数の患者が満足する効率的実践方法(4)	複数受け持ち時の看護の平等性
		複数受け持ち時の患者が満足する関わり方を学ぶ
		複数受け持ち時、優先順位を判断して効率的に動ける
		クリニカルパスを活用した効率的ケアの実践を学ぶ
看護観につながる目指す看護師像(33)	高い倫理観と実践力(14)	誠実さと倫理観を備えたナース
		人権の尊重と個人情報の保護ができる(3)
		礼儀・マナーを身に付けたナース(2)
		常に安全・安楽を考えた看護の提供をする(4)
		訴えや表情から患者を読み解く看護
		五感を使った観察で異常の早期発見ができるようになる
		自分の役割を理解し的確に動けるナースを目指す
		丁寧な看護実践
	心も支えられる看護師(11)	身体面だけでなく精神的に患者を支えられる看護師
		知識技術を持ち心に寄り添える看護を目指す(2)
		患者の話を聞いて寄り添う看護がしたい(6)
		患者・家族の気持ちがわかる看護師(2)
	患者の持つ力を引き出す看護(6)	その人らしさを生かし、引き出す看護
		個別性のある看護の提供(2)
		患者の前向きな闘病意欲を支える看護(2)
		患者の可能性を信じたケアの実践
	専門性の追求と向上心(2)	専門的説明や議論のできるナース
		看護師同士互いに能力を高めあえる
看護実習生としての自己課題(17)	知識・技術力不足の克服と対応力(6)	個別性のある看護をするための知識不足を改善する(3)
		臨機応変に対応できる力(2)
		正しい知識と技術を身に付ける
	看護師としてのコミュニケーション力(2)	自分の意見をまとめて発言できる力
		的を絞った会話ができるようになる
	看護実習生としての自覚と責任感(9)	医療チームメンバーとしての自覚を持つ
		体調の自己管理
		実習意欲を持って臨む
		実習の悩みを抱え込まない
		自分の行動一つで事故につながるという責任感を持つ
		勝手な自己判断、自己解決はしない(2)
		報告・連絡・相談ができる(2)

【看護管理について理解する】は[看護管理の実際を学ぶ][管理者の役割と実践を知る]の2つのサブカテゴリーからなり〈看護管理者が全体掌握のためにやっていること〉や〈病棟管理者はスタッフにどう対応しているか〉を実際の場面から学ぶことを課題にしている．【看護・医療におけるチームワークの重要性】は，[チームナーシングを理解する][チームリーダーの役割と実践を理解する]の病棟での看護方式とその管理の実際についての課題と，[医療チーム連携におけるコミュニケーション力]を課題に挙げている．【複数患者を同時に受持つことへの課題】は[複数患者受け持ち時の判断力と計画性][複数の患者が満足する効率的な実践方法]の2つのサブカテゴリーからなっている．はじめて複数の患者を受持つにあたり，まずは優先順位や時間配分を考えられる判断力や計画性を身に付けたいと考え，さらに複数の患者を受持っても患者が満足する関わりや効率的な関わりができるようになりたいとの課題を持っていた．【看護観につながる目指す看護師像】は[高い倫理観と実践力]を持ち[心も支えられる看護師][患者の持つ力を引き出す看護]を目指して，[専門性の追求と向上心]をもった看護師を目指す看護師像として描いていた．このカテゴリーはコード数が33と一番多く，学生が理想の看護師像を意識して実習に臨もうとしているのが読み取れる．【看護実習生としての自己課題】は，2番目にコード数が多く17であった．[知識・技術力不足の克服と対応力][看護師としてのコミュニケーション力]を身に付けたいとし，[看護実習生としての自覚と責任感]をもって実習に臨みたいという決意が述べられていた．

実習前の看護課題は，実習目標に概ね合致していた．学生はこれから行う実習で学べる内容を考えるに当たり，実習目標をガイドにイメージしたと思われる．実習前の段階では，看護管理や看護チームの協働や複数患者の受け持ちは，未知の体験であり具体的なイメージが難しいため【看護管理について理解する】，【看護・医療におけるチームワークの重要性】，【複数患者を同時に受持つことへの課題】はコード数が少ないと思われる．【看護観につながる目指す看護師像】，【看護実習生としての自己課題】の2つは，看護実践上必要とされる内容を示している．この2つはコードの半数以上を占めており，学生の関心が既習実習での学びを遂行すること，看護を実践する上での基本的能力や姿勢に向けられていることがわかる．

2. 統合実習後の学生の捉えた「看護課題」

実習後に学生が捉えた「看護課題」は，166コード，25サブカテゴリーと【病院内の看護管理の理解】，【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】，【看護展開のプロセスに基づく看護実践】，【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】，【状況変化に対応する実践】，【時間を効率よく管理する能力】，【専門職の役割と責務を認識した看護師像】の7つのカテゴリーに分類された．詳細な内容は表3に示す．

【病院内の看護管理の理解】は，［看護チームの機能を支える行動と成員の役割と組織構造］と［病棟の管理者の役割と実際］からなり，看護管理を病院と病棟の組織構造や各成員の役割から理解する課題を示している．【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】は，［患者を優先したチーム内での報告・連絡・相談の実際］［看護の質を維持・保証するための情報共有］［看護チームで良い看護を考える］［チームでの協働の必要性］［チームの一員として主体性を発揮する］の5つのサブカテゴリーから構成された．シャドウィングの学びと看護チームに参加して感じたチームワークから［チームの一員として主体性を発揮する］は，［患者を優先したチーム内での報告・連絡・相談の実際］と［看護の質を維持・保証するための情報共有］，［看護チームで良い看護を考える］に必要な要素であり，看護の質を維持向上させるには［チームでの協働の必要性］が重要であると捉えていた．このカテゴリーのコード数は49と一番多く，チーム内での看護実践が看護課題と認識している学生が多いことを示している．【看護展開のプロセスに

表3. 統合実習後に学生が捉えた「看護課題」の内容　表中（　）内はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
病院内の看護管理の理解（10）	看護チームの機能を支える行動と成員の役割と組織構造（6）	看護チームの機能の重要性（2）
		看護チーム各成員の役割
		病棟の看護組織の横と縦のつながり（2）
		病院全体の看護の活動の実際
	病棟の管理者の役割と実際（4）	病棟管理者は患者とスタッフを守り，円滑な業務へのマネジメントの役割がある（2）
		病棟の人とモノの管理の実際（2）
チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践（49）	患者を優先したチーム内での報告・連絡・相談の実際（14）	報告・連絡・相談がチーム内の協力につながる（6）
		チームで考え行動する楽しさと難しさ（3）
		患者を第一に考えてチーム内の報告連絡相談をする（2）
		前もって必要な情報をまとめ，わかりやすく効率的な報告する（3）
	看護の質を維持・保証するための情報共有（9）	看護の質を維持するための情報共有をする（4）
		確実に情報共有をする
		臨床での情報収取の実際（4）
	看護チームで良い看護を考える（10）	良い看護のために複数の看護師で考える（5）
		チームでの相談や振り返りでケアの内容をよくする（5）
	チームでの協働の必要性（12）	メンバーの動きを把握し、必要時協力する（6）
		チーム内の協働の重要性（5）
		チームメンバーとして活動する意識
	チームの一員として主体性を発揮する（4）	主体的にコミュニケーションを取る（3）
		自分から助けをメンバーに求める
看護展開のプロセスに基づく看護実践（23）	根拠に基づいた看護実践（4）	根拠をもってケアをする
		根拠に基づいた看護実践（3）
	アセスメントに基づく看護実践（6）	必要なケアをアセスメントに基づき判断する
		効果的な促しは性格や生活習慣からアセスメントする（3）
		患者を知ることで援助を考える（2）
	優先順位を考えた看護実践（8）	優先順位を考えた行動をする（6）
		総合的に判断して優先度を考える
		観察ポイントにも優先順位がある
	先を予測しての看護（5）	退院後の生活を考えた看護（2）
		先を予測してのコミュニケーション
		ケアや治療の成り行きを想定した計画・実施（2）
患者を中心とした関わりと信頼に応える実践（39）	業務の遂行だけに集中せず，患者を第一に考える（6）	業務の遂行だけでなく、患者を第一に考える（5）
		制限のある時間内でも患者一人一人をしっかり看護する
	複数の患者の個別性を尊重する（17）	複数の受け持ちでも患者尊重した看護の実践（8）
		患者の状況に合わせた援助
		患者個々を尊重した看護（5）
		複数患者の受け持ちでも個別性を捉える（3）
	誠意のある関わりで信頼関係を構築する（3）	患者を尊重したケアにより信頼を深める
		誠意を伝えることで信頼を築く（2）
	複数患者受け持ち時のコミュニケーション上の難しさ（4）	複数の患者と公平にコミュニケーションをとる(3)
		患者に迷惑をかけた時の対応
	患者を尊重したコミュニケーション（9）	患者目線で向き合う
		精神面に配慮できるコミュニケーションが重要（2）
		短時間のコミュニケーションでも患者の希望を確認する（2）
		ベッドサイドへ行くことで患者の想いに耳を傾けるコミュニケーションは大切（4）
状況変化に対応する実践（9）	状況に合わせた臨機応変な対応（6）	状況の変化に対応していく力を身につける(5)
		変更に対しスケジュールを修正して対応する
	患者の状態・希望に合わせた対応（3）	患者の状態に合わせて対応する（2）
		患者の希望を踏まえて対応する
時間を効率よく管理する能力（25）	時間を効率的に使うための具体的工夫（14）	効率よく動くための情報収集の工夫（5）
		情報収集のタイミングの判断
		事前準備をすると時間の活用ができる（3）
		知識をもつことで情報収集に時間をかけない
		時間を有効活用する工夫（3）
		複数患者の受け持つことを考えての時間配分
	意識的な時間管理（4）	時間管理の重要性（2）
		時間を見て行動する（2）
	予測される事柄を含めた計画立案（3）	行動計画を複数パターン考えた
		計画立案に時間的な余裕を持たせる
		患者の希望を予測して計画立案する
	時間調整を行う状況や判断する視点（4）	個別性に合わせて時間の調節をする（2）
		健康段階が異なる患者間の時間配分を考える
		業務が重なった時の誰が実施するのか判断する視点をもつ
専門職の役割と責務を認識した看護師像（11）	看護師として求められる姿勢（7）	周囲の状況に注意して行動する
		素早い判断や行動を意識する
		余裕をもち，落ち着いて対処する（3）
		積極的な行動
		看護職としての健康管理を行う
	基本的な知識・技術を身に付ける（2）	知識を身に付ける
		基本的な技術を身に付ける
	看護師の自己研鑽（2）	ケアについての振り返りをする
		看護師自身の振り返りと向上への努力

基づく看護実践】は，［根拠に基づいた看護実践］［アセスメントに基づく看護実践］［優先順位を考えた看護実践］［先を予測しての看護］の4つのサブカテゴリーから生成された．これらの看護実践は，既習実習で学んだ［根拠に基づく援助実践］や［アセスメントに基づく看護実践］，アセスメントをすることで導き出された［先を予測しての看護］を通して，より患者に適した看護実践をおこなう重要性を認識していた．複数患者を受け持つ体験からは，［優先順位を考えた看護実践］を課題と捉えていた．【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】は，［業務の遂行だけに集中せず，患者を第一に考える］［複数の患者の個別性を尊重する］［誠意のある関わりで信頼関係を構築する］［複数患者受け持ち時のコミュニケーション上の難しさ］［患者を尊重したコミュニケーション］の５つのサブカテゴリーから構成され，コード数が2番目に多い39であった．複数患者を受け持つ中で［複数患者受け持ち時のコミュニケーション上の難しさ］を実感し，［業務の遂行だけに集中せず，患者を第一に考える］［複数の患者の個別性を尊重する］ためには，時間の制約がある中でも〈ベッドサイドへ行くことで患者の想いに耳を傾けるコミュニケーションは大切にする〉ことが重要だと述べており，患者に向き合う［患者を尊重したコミュニケーション］をおこなう姿勢を大切に考えていた．そのような看護師の姿勢は，［誠意のある関わりで信頼関係を構築する］から，円滑な看護師―患者関係の構築の必要性を認識していると捉えた．【状況変化に対応する実践】は，［状況に合わせた臨機応変な対応］［患者の状態・希望に合わせた対応］の2つのサブカテゴリーからなり，〈状況の変化に対応していく力を身につける〉〈変更に対しスケジュールを合わせて対応する〉の急な予定の変更，〈患者の状態に合わせて対応する〉〈患者の希望を踏まえて対応する〉の患者の発するサインに応じる流動的な臨床に求められる能力を課題としていた．【時間を効率よく管理する能力】は，［時間を効率的に使うための具体的工夫］［意識的な時間管理］［予測される事柄を含めた計画立案］［時間調整を行う状況や判断する視点］の4つのサブカテゴリーから構成された．限られた時間内で複数患者の看護を行うためには，［時間を効率的に使うための具体的工夫］が必要であり，領域別実習よりも〈時間管理に気を配りながらケアする〉〈時間を見て行動する〉といった［意識的な時間管理］への意識が高まった．［予測される事柄を含めた計画立案］によって，戸惑いの時間や新しい援助を考える時間を短くできると気づいた．また，時間調整を考える時や業務が重なった時など［時間調整を行う状況や判断する視点］を持つことを課題とした．【専門職の役割と責務を認識した看護師像】は，［看護師として求められる姿勢］［基本的な知識・技術を身に付ける］［看護師の自己研鑽］の3つのサブカテゴリーから構成された．看護専門職として［看護師として求められる姿勢］［基本的な知識・技術を身に付ける］と，おこなったケアを内省し，より良い看護実践を目指していくため［看護師の自己研鑽］をする必要性を実習の体験から見出していた．

実習後は，【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】の重要性を認識し，複数の患者を受け持っても，領域別実習終了までに学んだ【看護展開のプロセスに基づく看護実践】が実際に個々の患者の看護実践のコアになると再認識していた．複数患者に偏りなく公平に関わり，必要とされる看護を実施するためには，【時間を効率よく管理する能力】を身につけ，看護の基本的となる，患者を尊重する【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】が日常業務で疎かにならないよう考えていた．複数患者を受け持つことでコミュニケーションの時間が短くなることや患者に迷惑をかけてしまった体験を通して，学生自身が考えていた看護との違いを実感し，自分の看護を問い直す機会を得たことが【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】として表現されていた．これは「看護の対象の最適健康状態の実現のための看護実践こそ学生の学ぶべきものであり，それは複数受け持とうが何よりも重視して学ばれなければならない最重要事項であるといった，実習実施上の基本的事項の再確認を促すもの[11]」と松谷らが述べている

通りの内容である．また，健康段階が異なり，様々なニーズが存在する臨床現場でそれに対応する必要性を実感し【状況変化に対応する実践】を認識していた．これらのことから学生は，看護実践をおこなうためには看護師個人の能力を向上させる努力ができる【専門職の役割と責務を認識した看護師像】を課題としたと考える．

学生は看護チームの実践をシャドウィングから学び，自身が複数患者を受け持つことでチームの存在が一人の看護師の看護実践を支えていることを実感した．学生自身の体験から導かれた看護課題がコード数に反映していると考える．【病院内の看護管理の理解】を学生が課題として実感するのはこの実習からは難しい．しかし，各病院で看護師が何を大切にして看護を実践しているかを看護部長の講話や病棟師長の話・シャドウィングから学生が認識していることは，分析対象とした記録以外の記録から読み取れた．

実習後の看護課題の内容は，文部科学省の大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2011）に報告された看護実践能力の5つ能力，看護実践能力のヒューマンケアの基本に関する実践能力，根拠に基づき看護を計画的に実践する能力，特定の健康課題に対応する実践能力，ケア環境とチーム体制整備に関する能力，専門職者として研鑽し続ける基本能力[12]に相当するが，あくまでも課題であり実践能力の獲得には至っていない．また，ケア環境とチーム体制整備に関する能力と安全な環境を提供する能力に相当する，臨床現場で起こりうる感染，転倒・転落，与薬ミスなど医療事故に対する安全管理を看護課題としている学生が見られない．複数受け持ちに意識を取られて医療安全に関する意識が希薄になったためだと考える．

専門職メンバー一人一人が自分たちの職業をどのように引き受けているかを表すプロフェッションフットが，日本の看護師に5要素備わっているとされている．5つの要素は「社会的意義」「最高で最上の仕事へのコミットメント」「同僚性・集合性」「自己実現・自己成長」「倫理・道徳規範の遵守」とされ，勝原は「自分のプロフェッションフットを確認することは，看護師である自分に向き合うことを意味する．」と述べている[13]．この実習で学生が捉えた看護課題は，プロフェッションフットの要素に通じる．看護専門職として看護チームで実践をする将来に出会うであろう困難を乗り切るとき，実習で見出した看護課題は学生個々が目指す看護に立ち戻る場所となると思われる．

3. 統合実習前と実習後の比較

実習前は5カテゴリーで，実習後は7カテゴリーであった．実習前にイメージが難しかった看護管理については，実習後に病院組織の理念と病棟目標のつながりや看護組織の各成員の役割と機能など，より詳細な内容を理解していた．しかし，学生は看護管理がどのように看護実践と関連しているかを認識するには至っていない．したがって，教員は，学生が看護管理と看護実践を実習の中で意識できるような介入をおこなう必要がある．

さらに，実習前の【看護・医療におけるチームワークの重要性】の〈チームナーシングを理解する〉〈リーダーの役割と実践を知る〉は，実習後に【チームワークを発揮した看護の質の維持向上させる実践】に変わり，チームワークが看護実践にどのような影響を与えるかが明確に認識されていた．チーム内で実際に行われている協働は，看護師間の情報共有や報告・連絡・相談が基本となり，看護の質の維持向上を支えているという構図が描かれていた．

実習前の【複数患者を同時に受持つことへの課題】は，【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】【時間を効率よく管理する能力】で具体的に複数患者の看護実践をおこなうための能力として捉えられてい

た．実習前の【看護観につながる目指す看護師像】の学びは，【看護展開のプロセスに基づく看護実践】と【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】【専門職の役割と責務を認識した看護師像】へと変化したと考える．学生は患者個々のアセスメントをすることで必要な看護を見出し，それぞれの患者に向き合う看護の重さを実感し，また複数患者の受け持ちの中で看護師の責任を果たす看護師像を描いていた．

実習前の【看護実習生としての自己課題】は，実習における複数受け持ちの実践で意識され，実習後の【病院内の看護管理の理解】を除く各カテゴリーの看護課題に反映されたと思われる．

本研究の限界と今後の課題

この研究は，学生の記録した文章を資料にしているため，データ抽出の際，学生の文章表現力の影響は否めない．また，本校は附属病院を有していないため，複数の病院施設で実習をおこなっているため，実習後の看護課題の違いがないとは言い切れない．

実習前の看護管理イメージを促進させるための講義を適切な時期に入れること，実習中に看護管理と看護実践をつなぐ介入方法を臨床の指導者と調整することが必要である．実習後の看護課題に無かった医療安全が意識されるよう実習前課題や実習中の助言の工夫も必要となる．

さらに，実習前後の看護課題のカテゴリーの構造と実習後の学びを明らかにすることで，看護実践能力の獲得に近づく教育方法が得られると考える．

結論

1. 実習前の看護課題は，【看護管理について理解する】，【看護・医療におけるチームワークの重要性】，【複数患者を同時に受持つことへの課題】，【看護観につながる目指す看護師像】，【看護実習生としての自己課題】の5つのカテゴリーが明らかになった．
2. 実習後の看護課題は，【病院内の看護管理の理解】，【チームワークを発揮した看護の質を維持向上させる実践】，【看護展開のプロセスに基づく看護実践】，【患者を中心とした関わりと信頼に応える実践】，【状況変化に対応する実践】，【時間を効率よく管理する能力】，【専門職の役割と責務を認識した看護師像】の7つのカテゴリーが明らかになった．
3. 実習前後の看護課題を比較すると，実習後は実習前の約2倍のコード数があった．これは学生が臨床現場の体験でより具体的な看護課題を発見したことを示す．
4. 学生は，複数受け持ちでの看護の質の維持向上のために自身がおこなうべきことと，看護チームで取り組む意味を見出し看護課題としていた．

引用文献

1）厚生労働省（2003）「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書，厚生労働省ホームページ，http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html（2015.10,11 14:00 アクセス）

2）加辺隆子，鎌田直子，荒谷美香ほか（2012）看護実践力の向上を目指した統合実習，学生の学びと今後の課題．東京慈恵医科大学雑誌．127（5），217-219.

3）豊増佳子，岩井郁子（2001）「総合実習：看護提供システム」の3年間の経緯．聖路加看護大学紀要．（27），72-79.

4）佐居由美，松谷美和子，平林優子ほか（2009）看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実

習の効果，看護学から臨床看護師へ．聖路加看護学会誌．13（1），24-33.
5）西尾ゆかり，太田節子，藤野みつ子ほか（2007）総合看護学実習Ⅱ（看護管理）で得られた看護学生の学び．滋賀医科大学看護学ジャーナル．5（1），58-63.
6）小野晴子，逸見英枝，金山弘代ほか（2011）複数の患者受け持ち導入による統合実習Aの到達度．新見公立大学紀要．32，7-14.
7）小野晴子，川崎泰子，掛屋純子ほか（2012）臨床実践能力の習得に向けた統合実習Bの達成度．新見公立大学紀要．33，1-10.
8）桝本朋子，田邊美津子，中西啓子（2013）臨地実習中の看護学への支援内容の検討．川崎医療短期大学紀要．33，9-15.
9）安藤詩乃，加世田有季，中越登子ほか（2008）臨地実習前後における看護観の変化，看護学生の患者のとらえ方に対する考え方の比較．バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌．10（2），1-7.
10）K.クリッペンドルフ（2006）．メッセージ分析の技法，勁草書房，東京．151-171.
11）松谷美和子，佐居由美，大久保暢子ほか（2009）看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「投稿実習（チームチャレンジ）」の評価，看護学生と看護師へのフォーカスグループ・インタビューの分析．聖路加看護学会誌．13（2），71-78.
12）文部科学省（2011）．「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」最終報告，文部科学省ホームページ，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf（2015 .11.26 23:00 アクセス）
13）勝原裕美子（2007）看護師のキャリア論，ライフサポート社，東京．106-113.

（平成27年11月30日稿）
査読終了日　平成28年1月6日